

小学校教科書に反映された子どもに期待される対処的対人関係：「東洋」対「西洋」の対比は妥当か

著者	塘 利枝子, 木村 敦
著者所属(日)	平安女学院大学現代文化学科国際コミュニケーション学科 国立政治大学大学院修士課程(台湾)
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	1
ページ	95-109
発行年	2001-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001156/

小学校教科書に反映された子どもに期待される対処的対人関係

—「東洋」対「西洋」の対比は妥当か—

塘 利枝子 木村 敦

(国立政治大学大学院修士課程)

[問題と目的]

1. 文化の中で育つ子ども

子どもは自分の生まれ育った文化・社会の中で、身近な大人の価値観や、周囲のさまざまな評価を受けながら、それぞれの文化・社会の中で何が重要で何が周囲から期待された行動かを学習していく。その結果、文化や社会が異なれば、そこで生活する人間の行動、例えば他者との間の衝突を回避する方法や、解決する方法が異なると言われてきた。中でも欧米社会、特にアメリカでは相手に対して自分の意見をはっきりと表明し、相手と自分の意見が異なる場合には、一般的に相手の意見を変えることによって問題解決を行うという。一方、日本では正面切って相手と対立しようとはせず、自らのやり方を変えて相手や周囲の環境に合わせることで、対人間の問題を処理しようとする傾向が見られる(中山,1988;熊山1991)。

またワイツら(Rothbaum, Weisz & Snyder, 1982; Weisz, Rothbaum & Blackburn,1984)によると、アメリカ社会ではプライマリーコントロール(primary control)といて、他者との間で何らかの意見・行動が食い違った場合、相手のやり方を変えることによって、両者間の問題を解決しようとする傾向がみられる。しかし日本社会ではセカンダリーコントロール(secondary control)といて、自分自身のやり方を変えることにより、相手との間の問題を解決したり、周囲の状況を改善する傾向がより強いという。ワイツらはアメリカと日本の対人関係のあり方をこの2つの観点から論じたが、彼らのプライマリー・セカンダリーコントロールの仮説は、他の社会においても検証が試みられてきた。例えば日本とドイツの母子間の相互作用を比較した研究では、フラストレーション場面において、ドイツより日本の母親の方が子どもに対してセカンダリーコントロールの行動をより多くとることが認められ、日本の子どもも母親に対して、母親と同様の傾向を持つという(Trommsdorff & Friedlmeier, 1993)。

しかし本当に対人関係のあり方を、「東洋」対「西洋」¹というように2つに大きく分けて論じてよいのだろうか。このように文化の特徴を大きく2つに分けて対比させる「文化の二分法」論は、ワイツらの唱えたコントロール仮説のみならず、今までの文化比較研究においても様々な場を取り上げられてきた。例えば「東洋」と「西洋」の比較として、「独立的自己(independent self)」と「相互依存的自己(interdependent self)」(Markus & Kitayama,1991; 1994)、「自己中心主義(ego-centrism)」と「社会中心主義(socio-centrism)」(Shweder & Bourne, 1984)、そして「個人主義(individualism)」と「集団主義(collectivism)」(Triandis,1994)などはその代表的なものである。このような「文化の二分法」論は、本研究で行う各国の国語教科書に描き出された望ましい対人関係のあり方にも適用されるのだろうか。本稿ではワイツらの仮説を参考にしながら、「東洋」と「西洋」の中でも日本、台湾(中華民国:以下台湾と称する)²、イギリス、ドイツという4つの国の教科書を選び、「東洋」対「西洋」の比較分析で言われてきた「文化の二分法」論について検証する。

2. 教科書の特性

教科書は各国を担う次世代の健全な発達と学習の向上を目指し、各国の教育関係者により作成されている。作成過程には長い時間と多くの労力が投入され、国によっては政府の厳しい検査を受ける。すなわち大人は教科書を通して、その時代の社会の理想像や大人たちの期待を、子どもに伝えようとしていると言えよう。子どもがその理想像や期待をそのまま受け取るか否かは国や地域によって異なり、また同じ国の中でも子どものサブカルチャーによって異なるかもしれない。さらに子ども一人ひとりの受け止め方は必ずしも同一のものであるとは限らないであろう。しかし少なくとも教科書の作品内に描かれた登場人物の行動や彼らを取りまく状況には、各社会内で望ましいとされる行動、価値観、願いなどが反映されていると考えられる。本研究ではこの前提に立ち、小学校国語教科書の作品に登場する主人公の要求や行動に影響を与えるものの特性と、それらに対する主人公の行動反応について、日本、台湾、イギリス及びドイツの教科書の作品を分析することにより、各社会内の大人たちが次世代に期待する対人関係のあり方について比較しながら、前述した「東洋」対「西洋」といった「文化の二分法」論について検討する。

〔方法〕

1. 研究素材の範囲

(1)分析対象となった教科書の教科と学年

本研究では日本、台湾、イギリス及びドイツの小学校教科書内の作品を分析対象としたが、その中でも特に、各国の言葉を母語とする子どもを対象とした国語の教科書に限定した。教科書はどの教科も各国の大人が子どもに身につけてほしいと期待する内容を含んでいるが、教科の特性により子どもにどのような教育的効果をもたらすかはそれぞれ異なっている。教科の中でも国語、道徳、宗教、家庭科の教科書は、いずれも各社会内において適切だと思われる行動を子どもに提示しているものであろうが、それらの教科の中からあえて本研究で国語を選択したのは、以下の2つの理由による。第1の理由は、国によって道徳、宗教、家庭科などはその教科自体が存在しない可能性があるからである。しかしその国の母国語を教える国語に当たる教科は、どの国にも必ずと言ってよいほど存在する。

分析対象を国語に絞った第2の理由は、道徳、宗教、家庭科の教科書には、各社会の価値観が意図的に注入されている場合があり、必ずしも現実社会で一般的に受け入れられている望ましい行動を反映しているとは限らないからである。例えば日本の家庭科の教科書には、育児や家事を男子もすることが望ましいと書かれているが（伊東他, 1991；岩崎他, 1991；大日向他, 1994；香川・本多・湯沢, 1994；樋口他, 1994）、実際の日本社会では育児や家事を担当するのはほとんどが女性である（経済企画庁, 1992；NHK放送文化研究所世論調査部, 1996）。このように教科書の中に意図的に注入された価値観や行動は、実際のものとの間にずれが生じることが多い。国語もこれらの教科と同様、教科書という制約を受ける以上、現実社会をそのまま反映しているとは言い難い面もあるかもしれない。しかし、その国の言語を教える教科、すなわち日本の国語に該当する教科は、本来文法や文字の読み書き、作品の内容把握について教えることが教科の第一の目的であり、それぞれの社会の価値観や望ましい行動について教えることは二次的なものとなる。したがって、理想的には望ましいが、現実社会の人々の行動とは大きく異なる行動や価値観が盛り込まれた作品が掲載されているというよりは、誰が見ても違和感のない一般的な作品が、道徳、宗教、家庭科の教科書に比べてより多く取り上げられていると推測される。国語の教科書に描かれている「人間像」は、その社会・文化の中で一般的とされる「人間像」と大きく乖離していない（今井, 1991）と言えるであろう。以上のような各教科の特性を考慮した上で、本研究では、国語の教科書に掲載されている作品を分析の対象として選んだ。

更に分析対象とした学年については、学校教育における社会化の最初の段階である小学校1～3年

生を取り上げた。日本や台湾では、同一年齢の子どもが皆一斉に同じ学年の教科書を使用する。しかしイギリスやドイツでは教科書の使用状況が日本とは異なり、同一学年でも子ども一人ひとりの能力に応じて使用される教科書のレベルが異なっている。そこでイギリスやドイツでは、教科書会社が基準として設けている年齢によって分析する教科書を選定し、日本で分析対象となっている学年相当の6～9歳児が使用する教科書を取り上げた。

(2)分析対象となった作品の選定

国語の教科書の中でも、説明文や単に状況を説明している詩は除き、起承転結を持つ作品を分析対象作品として取り上げた。以前に行った日本とイギリスの教科書の比較研究(塘・真島・野本, 1998)においては、説明文以外に子どもの作文や詩もすべて分析対象外とした。しかし台湾の教科書をも分析対象にしたことで、この点に変更が生じた³。台湾の教科書には子どもの作文や手紙のスタイルになっている作品の中に、起承転結を持つ話が入っていたり、詩が起承転結の形でストーリー性を持っていたりするものが見られた。そこでこの点を考慮し、起承転結を持つ作品であればすべて分析の対象に含めることとした。その結果、日本では118編、台湾では85編、ドイツでは259編、そしてイギリスでは75編の作品が分析対象となった。尚、同じ内容の作品でも、異なる出版社の作品であれば、その作品の重要度を分析に加味するために、算出の際には別々の作品として扱った。以上の作品選択に関しては、日本語を母語とする心理学専攻の研究者3人、中国語を母語とする台湾在住の心理学専攻の研究者1人、日本語を母語とする台湾に留学中の教育学専攻の大学院生1人、ドイツ語を母語とする心理学専攻の研究者1人が、以上の基準に沿って独立に評定し、評定不一致の際にはそれぞれ分担している国の担当者同士が話し合って分析対象とする作品の採択を決定した。

尚、本研究で扱った教科書は、日本では東京書籍、大阪書籍、日本書籍、光村図書、学校図書、教育出版の6社から出版されている1991年文部省検定済み(1992年発行)のものである。台湾では1996年に国立編譯館主編で出版されている1種類⁴を分析対象とした。イギリスではOxford University Press, Ginn and Company Ltd., Basil Blackwell Ltd., Schlastic Publication Ltd., Heinemannの5社で1980年から1991年に出版された教科書を分析に使用した⁵。さらにドイツでは1996年に16州それぞれから発行されている教科書推薦リスト(Schulbuchkatalog)⁶に掲載された教科書のなかでも、10州以上の州で推薦されている教科書のみを採択した⁷。教科書が出版されている事情、教科書に載せる作品の採択方法、検定制度、教科書の実際の扱われ方は国によって異なるが、次世代の育成のために教科書の内容を慎重に吟味していることに関してはどの国も共通しており⁸、そこには各国の大人たちが次世代に期待する行動が反映されていると考えられる。

(3)作品内の分析対象場面と主人公の選定

前述したように、本研究では各国で使用されている国語教科書の中から、一定の基準を用いて作品を選択し、それらの作品の内容について分析を行う。しかし必ずしも作品全体の内容を扱っているとは限らない。分析対象となる部分を、1つの作品につき2場面取り出して分析している。この場面選択については、作品の中で主人公に最も影響を与えたと考えられる事柄が起こる場面と、主人公がその事柄に対してどのように対処するかを描いている場面を、それぞれの国を担当する複数の評定者が独立に選択して決定した。また評定者間に不一致が生じた際には、作品の題名の意味により近く、より文章(センテンス)数⁹の多い場面を分析対象場面として選んだ。また教科書のなかに描かれている挿絵や図版なども、各文化の特徴を表していると思われるが、本研究では文章のみを分析対象とした。

さらに各作品の中で最も登場回数の多い人物を主人公と設定し、この人物を作品ごとに1人選んだ。主人公は必ずしも人間である必要はなく、動物が擬人化されている場合にもその対象となった。また主人公の選定に当たっては、人物の登場回数のみではなく作品の題名をも考慮した。

2. 分析方法

本研究では、ウィツらのプライマリー・セカンダリーコントロールの仮説を、教科書の作品に登場する主人公の行動に当てはめて検討する。但し主人公が相手と自分の行動をどのようにコントロールしていくかは、主人公の行動の継続や要求に影響を与える周囲の状況や他者の行動によっても異なるであろう。本研究ではこれらを総称して「外的刺激」と呼ぶが、外的刺激の行動とそれに対する主人公の行動という2つの側面の組み合わせによって、プライマリー・セカンダリーコントロールを見ていくこととする。第1に外的刺激について、第2に外的刺激に対する主人公の対処行動について、それぞれ3つの観点から分析方法を説明する。

(1)外的刺激に関する分析方法

まず外的刺激に関する分析方法の1つ目の観点とは、「外的刺激の種類」についてである。外的刺激の種類を①「他者」と②「状況」に分類する。「他者」とは、外的刺激の主体が人間または動物などの生物体を意味し、具体的には「先生」「親」「友だち」などを指す。「状況」とは、災害のような自然状態、戦争、そして偶然に起こった事象などを意味し、具体的には「台風」「戦争」「道に迷ってしまったこと」などを指す。

2つ目の分析観点は「外的刺激の方向性」についてである。外的刺激の方向性を、①「同方向」と②「逆方向」の2つに分類する。「同方向」とは、主人公が自分の要求を満足させるために起こす行動や、現状態の維持・継続に対して主人公の行動を援助・促進するというように、主人公の要求や行動の継続に対して同方向の形で、外的刺激が影響を与えることを意味する。また「逆方向」とは、阻止・対立といった逆方向の形で、外的刺激が主人公の行動に影響を与えることを意味する。

3つ目の分析観点とは、「外的刺激の意図の有無」についてである。外的刺激の種類で①「他者」と分類されたもののみを対象に、外的刺激の意図の有無を、①「意図あり」と②「意図なし」の2つに分類する。「意図あり」とは、外的刺激が主人公の行動を変容させようとする意図があったと解釈できるものを指す。「意図なし」とは、外的刺激が主人公の行動を変容させようという意図はなかったものを指し、より具体的に言えば「わざと」「故意に」主人公の行動を変えようとしたのではないことを意味する。

(2)主人公の対処行動に関する分析方法

外的刺激に対する主人公の行動を、本研究では「対処行動」と呼んでいるが、この対処行動の3つの分析観点について説明する。1つ目の観点とは、主人公の外的刺激に対する受容の有無についてである。受容の有無を、①「受容あり」と②「受容なし」の2つに分類する。「受容あり」とは、どのような外的刺激であっても、主人公が外的刺激を受け入れることを意味し、「受容なし」とは、外的刺激を主人公が受け入れないことを意味する。

2つ目の観点とは、対処行動の反応形態についてである。反応形態を、①「能動的」と②「受動的」の2つに分類する。「能動的」とは、主人公の外的刺激に対する受容の有無に関わらず、能動的・積極的に反応することである。すなわち、外的刺激を積極的に受け入れ感謝の意を示したり、または積極的に反発して異議を唱えたりする反応であることを意味している。それに対して「受動的」とは、外的刺激に対して、受け身的な反応を示すことを意味する。すなわち、外的刺激を受け入れる際にも、主人公の積極的な反応が見られず、同方向の外的刺激を何も言わず静かに受け入れたり、自分の意に沿わないことに対しても、消極的な反対しか示さなかったりする主人公の態度のことを指す。

3つ目の観点とは、外的刺激に対する変容の有無についてである。変容の有無を、①「外的刺激を変容させる」と②「外的刺激を変容させない」の2つに分類する。「変容させる」とは、外的刺激から逆方向の刺激を受けた場合に、主人公が外的刺激の行動や要求を変容させることを意味する。それに対して、「変容させない」とは、外的刺激から逆方向の刺激を受けた場合に、主人公が外的刺激の

行動や要求を変容させないことを意味する。

尚、外的刺激及び主人公の対処行動に関するいずれの分類においても、分類の際に評定者間で意見が最後まで分かれ、どちらとも決められない場合には、欠損値扱いとして分析から除外した。また以上の方法で行った分析事例を TABLE 1 に示した。

TABLE 1 分析事例

国名	作品名	主人公	物語の概要	外的刺激			主人公の対処行動		
				種類	意図の有無	方向性	受容の有無	反応形態	外的刺激に対する変容の有無
日本	お母さんの目	せつこ(娘)	せつこは母親の黒いひとみの中に小さな自分が映っているのに気づき、母親の目の中をさらにのぞき込むと、いろいろなものが見える。それを不思議に思って母親に尋ねると、「美しいものに出会って一生懸命見つめると、それが目ににじんで心にすみつくのよ。」とせつこに説明する。せつこはそのときその言葉の意味が少ししか分からなかったが、成長する過程で美しいものに出会うたびに、母親の目を思い出すのだった。	他者(母親)	意図あり	同方向	受容あり	消極的	—
台湾	お母さんと先生(媽媽和老師)	娘	突然の大雨の中を母親がレインコートを着たまま娘のために持ってきてくれた。その場に居合わせた先生が、お母さんがいつも気にかけていて、かわいがってくれるからあなたは本当に幸せだと、その娘に言うと、その娘は、先生は自分に母親の愛を覚えてくれたと言って感謝する。	他者(先生)	意図あり	同方向	受容あり	積極的	—
イギリス	ハミッド、ベストを尽くす(Hamid does his best)	ハミッド(少年)	ハミッドはサッカーが得意で、皆から期待もされていたが、サッカーの試合当日、病気になってしまう。無理を押して出場するが、結局負けてしまう。	状況(病気になってしまったこと)	意図なし	逆方向	受容なし	積極的	変容させない
ドイツ	特別な小さなうさぎ(Ein besonders kleiner Hase)	うさぎ	狼がうさぎを殺そうと襲いかかる。しかしそのうさぎは逆に狼を打ちのめしてしまった。	他者(狼)	意図あり	逆方向	受容なし	積極的	変容させる

(3)プライマリー・セカンダリーコントロールに関する分析方法

プライマリー・セカンダリーコントロールは、今まで述べてきた外的刺激と主人公の対処行動の組み合わせで構成される。まず、プライマリーコントロールとは、外的刺激の「方向性」が「逆方向」の際に、主人公の「受容の有無」が「受容なし」であり、かつ主人公の外的刺激に対する「変容の有無」が「変容させる」と評定された主人公の行動に該当する。すなわち本研究でのプライマリーコントロールとは、外的刺激が主人公の行動の継続や要求とは異なっていた場合に、主人公がそれを受け入れず、さらに主人公が外的刺激の状態や行動を変容させることを意味している。

次に、セカンダリーコントロールとは、「外的刺激の方向性」が逆方向の際に、主人公の「受容反応の有無」が「受容あり」と評定された主人公の行動に該当する。すなわちここで意味するセカンダリーコントロールとは、外的刺激が主人公の行動の継続や要求とは異なっていた場合でも、主人公はそれを受け入れ、受け入れることによって自分のやり方を変えて外的刺激に合わせることを意味している。

本稿では外的刺激、主人公の対処行動、そして外的刺激と主人公の対処行動を組み合わせたプライマリー・セカンダリーコントロールに焦点を当てて、それぞれの出現率を4カ国間で比較し、有意差が見られた場合にはアジア対欧州間、アジア内、欧州内でも比較検討する。

〔結果と考察〕

1. 外的刺激に関する比較

第1に、外的刺激の種類を「他者」と「状況」に分け、その出現率について4カ国間の比較を行ったところ (TABLE2)、4カ国中、日本が最も「状況」刺激の割合が高かった ($\chi^2 = (3, N=537) = 30.77, p < .01$)。さらにアジア対欧州の比較を行ったが、特に有意な差は認められなかった¹⁰。むしろアジア内、欧州内の2つの国家間にそれぞれ有意な違いが見られ、アジア内では、日本の方が台湾より「状況」刺激の割合が高く ($\chi^2 = (1, N=203) = 17.15, p < .05$)、欧州内では、イギリスの方がドイツよりも「状況」刺激の割合が高かった ($\chi^2 = (1, N=334) = 8.53, p < .05$)。以上の結果から、アジアと欧州間での有意な違いというよりも、アジア内、欧州内での違いが認められた。

TABLE 2 外的刺激の種類

() 内は%

種類 国名	他者	状況	合計	
日本	66 (55.93)	52 (44.07)	118 (100.00)	$\chi^2 = 30.77^{**}$
台湾	71 (83.53)	14 (16.47)	85 (100.00)	
イギリス	47 (62.67)	28 (37.33)	75 (100.00)	
ドイツ	205 (79.15)	54 (20.85)	259 (100.00)	
合計	389 (72.44)	148 (27.56)	537 (100.00)	

** p < .01

第2に、外的刺激の方向性を「同方向」と「逆方向」に分け、その出現率について4カ国間の比較を行ったところ (TABLE3)、4カ国中で、台湾が最も「同方向」刺激の割合が高く、ドイツが最も「逆方向」の刺激の割合が高かった ($\chi^2 = (3, N=529) = 66.49, p < .01$)。さらにアジア対欧州では、アジアの方が「同方向」刺激の割合が高い ($\chi^2 = (1, N=529) = 30.30, p < .01$)。しかしアジア内においても2カ国間に有意な違いが見られ、台湾の方が日本よりも「同方向」刺激の割合が高かった ($\chi^2 = (1, N=201) = 25.29, p < .01$)。なお、欧州内では2カ国間に有意な違いは認められなかった。

TABLE 3 外的刺激の方向性

() 内は%

方向性 国名	同方向	逆方向	合計	
日本	32 (27.12)	86 (72.88)	118 (100.00)	$\chi^2 = 66.49^{**}$
台湾	52 (62.65)	31 (37.35)	83 (100.00)	
イギリス	22 (30.14)	51 (69.86)	73 (100.00)	
ドイツ	42 (16.47)	213 (83.53)	255 (100.00)	
合計	148 (27.98)	381 (72.02)	529 (100.00)	

注： 欠損値 = 8

** p < .01

例えば台湾の教科書には、弁当を忘れて泣いてしまった子どもに対して、友だちがその子どもの涙を拭いてやり自分の弁当の中身を少し分けてやった『善意の手(善意的手)』(国立編譯館主編, 1996a)という話がある。それとは逆にドイツの教科書の『モニと自転車 (Moni und ihr Fahrrad)』では、モニという少女が自転車の色を塗り替えているところに次々と友だちがやってきて、「その色はおかしい。違う色にすればよい。」とすべての友だちがモニに対して反対意見を述べるという作品がある (Kolk & Kuch, 1992)。

このようにそれぞれの教科書に登場する「友だち」の行動は、子どもにどのような行動がその文化

・社会の中で適切かを提示する役割を担っている。もちろん、台湾の教科書が他国の教科書に比べて、現実と離れた理想像を子どもたちにより多く示している可能性がないとは言えない。しかし少なくとも教科書が大人の期待を反映しているものであるならば、他者への援助を基本的に重視しているか、それとも他者とは異なる自分の意見を明確に出すことを基本的に重視しているかによって、子どもに対する発達期待は異なったものになると考えられる。

第3に、外的刺激の意図の有無を「意図あり」と「意図なし」に分け、その出現率について4カ国間の比較を行ったが、4カ国間に有意な違いは認められず、さらに外的刺激の方向性別に意図の有無を検討したが、4カ国間に有意差は見られなかった。以前行った日英比較の研究結果（塘・真島・野本, 1998）では、イギリスに比べて日本では逆方向の刺激を与える場合には意図せずに行う割合が高かった。しかし本研究では特に日本が他の3カ国に比べてそのような傾向が見られるとは言えなかった。このように以前とは異なった結果が得られたのは、分析対象とした教科書の出版年の違いにも理由があると思われるので、今後は他の国と出版年を同じにして再検討する予定である。

2. 同方向の外的刺激に対する主人公の対処行動に関する比較

主人公の対処行動は、外的刺激の方向性と関係があるため、外的刺激の方向性ごとに主人公の対処行動を検討する。ここでは特に外的刺激が同方向の場合について見てみよう。まず主人公の受容の有無を「受容あり」と「受容なし」に分け、その出現率について4カ国間で比較したが、特に有意な違いは見られなかった（TABLE4）。すなわちどの国においても、周囲の状況や他者が援助の手を差し伸べた場合には、どの主人公もそれらを素直に受け入れることが多いと言えるであろう。これは教科書を使用する対象年齢が児童期前期であるため、周囲の状況や他者が援助してくれた場合には、それらを素直に受け取ることを期待されている年齢であることが影響しているからだと思われる。また教科書という特性上、子どもが手にする教科書以外の物語や漫画などに比べて、大人の期待する子ども像がより誇張して描かれていることとも関係している可能性はあるだろう。しかしいずれにせよ、このような年齢の子どもの行動に対する大人の期待は、どの国にも大きな違いは見られないようである。

TABLE 4 同方向の外的刺激に対する主人公の受容の有無

() 内は%

国名	受容の有無	受容あり	受容なし	合計	
日本		32 (100.00)	0 (0.00)	32 (100.00)	$\chi^2=7.03$
台湾		48 (97.96)	1 (2.04)	49 (100.00)	
イギリス		21 (95.45)	1 (4.55)	22 (100.00)	
ドイツ		37 (88.10)	5 (11.90)	42 (100.00)	
合計		138 (95.17)	7 (4.83)	145 (100.00)	

注： 欠損値=3

次に、外的刺激が同方向の場合の主人公の反応形態について検討する（TABLE5）。「同方向」刺激に対して受容した場合には、4カ国中で、台湾が最も「能動的」に反応する割合が高い（ $\chi^2 = (3, N=137) = 47.59, p < .01$ ）。またアジア対欧州では、アジアの方が「能動的」に反応する割合が高い（ $\chi^2 = (1, N=137) = 27.52, p < .01$ ）。さらにアジア内では、台湾の方が日本よりも「能動的」に反応する割合が高いが（ $\chi^2 = (1, N=78) = 24.80, p < .01$ ）、欧州内では特に有意差は認められない。これらの結果から、確かにアジアと欧州の間にも違いが見られるが、アジア内でも国によって異なる傾向があると考えられる。アジア対欧州の違いだと思われていたことが、実はアジア内の1つの国に

よってその違いが強調されていたに過ぎないと言えるであろう。

T A B L E 5 同方向の外的刺激に対する主人公の反応形態

() 内は%

国名	反応形態	能動的	受動的	合計	
日本		15 (46.88)	17 (53.13)	32 (100.00)	$\chi^2=47.59^{**}$
台湾		45 (97.83)	1 (2.17)	46 (100.00)	
イギリス		7 (31.82)	15 (66.18)	22 (100.00)	
ドイツ		12 (32.43)	25 (65.57)	37 (100.00)	
合計		79 (57.66)	58 (42.34)	137 (100.00)	

注： 欠損値 = 5

** p < .01

実際の例で見てみよう。特にアジア内での違いが存在したため、ここでは日本と台湾の教科書の作品例をあげる。まず台湾の『お母さんと先生（媽媽和老師）』（國立編譯館主編 1996b）という作品の中に、突然の大雨の中、母親がレインコートを娘のために持ってきてくれたという話がある。その場に居合わせた先生が「お母さんは子どもたちのことをいつも気にかけているのですよ。お母さんにこんなにかわいがってもらえて、あなたは本当に幸せですね。」とその娘に言うと、その娘は「先生、先生、ありがとう！先生は私に、お母さんが私をどれだけ気にかけてくれているかを教えてくれた。」と答えている。教師と子どもの関係が台湾と他国では異なることも影響しているのかもしれないが、このような直接的な表現方法を台湾の大人達は子どもに期待していると思われる。

しかし同じアジアの国でも、日本では他者の援助やほめ言葉に対してこのような積極的な反応は認められず、他者の援助を受け入れたとしても「心の中で」「ひそかに」感謝するのである。例えば『お母さんの目』（あまん, 1992）という作品では、母親が娘の質問に丁寧に答えてやるが、娘は母親の答えの深い意味をその時には理解できず、台湾の教科書にあるような直接的な感謝表現の記述はない。娘は大人になる過程の中で母親の言葉を心の中で何度も思い出し、その言葉の意味をかみしめるのである。また日本の作品では、感謝の気持ちを相手に表すにしても、いかにも感謝しているという態度をとらずに、間接的な感情表現を用いる。例えば『たぬきの糸車』（きし, 1992）という作品では、たぬきが毎晩のように木こりの家にやってきていたずらをするので、木こりの夫婦は罾をしかけるのだが、罾にかかったたぬきを見て、かわいそうに思った木こりのおかみさんはそのたぬきを助けてやる。そのお返しに、たぬきはおかみさんに誰がしたかわからないような形でさまざまな御礼をするのである。このように相手のサポートに対して、自分の喜びや感謝をどのように表現することが望ましいかという、子どもたちに期待される感情表現は、同じアジアの国においても異なっていると考えられる。

3. 逆方向の外的刺激に対する主人公の対処行動に関する比較

同方向の外的刺激に対する主人公の対処行動の結果から、アジア対欧州という「文化の二分法」論は支持されなかった。それでは逆方向の外的刺激に対する主人公の対処行動に関してはどうか。これについては特にプライマリー・セカンダリーコントロールの観点から検討する。プライマリーコントロールは、セカンダリーコントロールに比べて分析手続きが1つ多いため、まずセカンダリーコントロールに関する比較を行った後に、プライマリーコントロールの比較を行う。

(1)セカンダリーコントロールに関する比較

セカンダリーコントロールとは、主人公が自分側の要求や行動を変えて、逆方向の外的刺激を受容することを意味している。そこで逆方向の外的刺激に対する主人公の受容の有無について4カ国間で比較を行った（TABLE6）。その結果、4カ国中、日本が最も「逆方向」の刺激を受容する割合が高か

った ($\chi^2 = (3, N=374) = 23.51, p < .01$)。またアジア対欧州では、アジアの方が「逆方向」の刺激を受容する割合が高い ($\chi^2 = (1, N=374) = 20.85, p < .01$)。しかしアジア内、及び欧州内では、「逆方向」の刺激を受容する割合に有意な違いは見られなかった。

TABLE 6 セカンダリーコントロール () 内は%

国名	受容の有無	受容あり	受容なし	合計	
日本		57 (66.28)	29 (33.72)	86 (100.00)	$\chi^2 = 23.51^{**}$
台湾		12 (48.00)	13 (52.00)	25 (100.00)	
イギリス		18 (35.29)	33 (64.71)	51 (100.00)	
ドイツ		78 (38.79)	134 (63.21)	212 (100.00)	
合計		165 (44.12)	209 (55.88)	374 (100.00)	

注： 欠損値 = 7

$^{**} p < .01$

以上の結果から、自分の意に添わなくても、自分のやり方や気持ちを変えて相手や周囲の状況に合わせるというセカンダリーコントロールは、欧州よりアジアにより顕著に見られると言えよう。しかし、日本と台湾の間に有意差は見られなかったとはいえ、「逆方向」の刺激を過半数の主人公が受容したのは4カ国中、日本のみであり、欧州よりアジアの方がセカンダリーコントロールの傾向が強く見られるとの仮説は、今後アジア内で対象とする国の数を増やして検討する必要があるだろう¹¹。

(2)プライマリーコントロールに関する比較

プライマリーコントロールとは、逆方向の外的刺激に対して主人公がそれを受容せず、さらに外的刺激の状況や要求・行動を変容させることを意味している。そこで逆方向の外的刺激に対して主人公が受容しなかった際に外的刺激を変容させたか否かを4カ国間で比較した (TABLE7)。その結果、すべての国で外的刺激を変容させる割合が高いため、4カ国間に有意差は認められなかった。したがってどの国においても、他者が自分のやり方に反対したり、困難な状況に出会って、それらを受け入れなかった場合には、他者や状況を変えるという相手に対する何らかの働きかけをすることを、大人は子どもたちに期待していると言える。すなわちお互いの考えや行動が異なり、相手の考えを受け入れられないからといって、無視したりお互い異なる道を進んでいくのではなく、相手としっかり関わって問題解決をすることがどの国の子どもたちにも望まれていると考えられる。

TABLE 7 プライマリーコントロール () 内は%

国名	変容の有無	変容させる	変容させない	合計	
日本		22 (75.86)	7 (24.14)	29 (100.00)	$\chi^2 = 0.80$
台湾		6 (75.00)	2 (25.00)	8 (100.00)	
イギリス		22 (84.62)	4 (15.38)	26 (100.00)	
ドイツ		9 (81.82)	2 (18.18)	11 (100.00)	
合計		59 (79.73)	15 (20.27)	74 (100.00)	

注：欠損値 = 142

前述したように、ウィットらはプライマリーコントロールがアメリカ社会の特徴であり、またその他の研究でも、「西洋」の対人関係にはプライマリーコントロールの特徴が見られると言われている。しかし本研究ではアジアと欧州の4カ国間に有意な違いは認められなかった。すなわち主人公の要求や意に反する状況になっても、また他者が主人公の意見や行動に異議を申し立てても、それらを受け

入れず、逆にそれらを変容させて自分の要求や意見を通すような対処的対人関係のありかたについては、どの国にもあまり大きな違いは見られないようである。したがって本研究のプライマリーコントロールにおいては、「東洋」対「西洋」といった「文化の二分法」論は否定されたとと言えるであろう。

〔全体的考察〕

1. 本研究で「文化の二分法」論が否定された理由と今後の課題

今まで言われてきた「文化の二分法」論が、本研究において否定された理由について、外的刺激、主人公の対処行動、2つのコントロールの結果からさらに検討してみよう。

第1に、外的刺激の結果から考察する。日本はハイコンテクスト社会だと言われ、情報よりもコンテクスト（状況）に依存することが多いと言われている（ホール, 1983）。またアジアは欧米に比べてハイコンテクスト社会だとされており、アジアの中でも日本は最もその傾向が強く、中国も日本の近くに位置している（フェラーロ, 1992）。本研究でも「外的刺激の種類」において、「状況」刺激が主人公に影響を与える割合が最も高いのは日本であった。しかし、同じアジア内でも日本と台湾では同様の傾向は見られない。すなわちアジア地域をコンテクスト社会として一括りにすることはできず、同じアジア内でも、自分と周囲の関係性の中からどの程度状況を読みとることを重視するか、他者の行動や発話という具体的な情報をどの程度他者に与えることが適切だとされているかについては、国により少しずつ異なると考えられ、この点についてはさらに検討する必要があるだろう。

第2に、「外的刺激の方向性」に関しても、アジア対欧州間の分析では、アジアの方が「同方向」の割合が高いという結果が見られたが、同じアジア内でも、日本と台湾では異なる傾向を見せた。台湾の方が主人公を援助したり主人公の意に添う行動や状況が、日本に比べて有意に多かったのである。このようにアジアと欧州の違いと思われてきたものも、さらに同一地域内を細かく分析してみると、アジアの傾向として一括りにはできない相違点が見られるのである。アジアの傾向と思われてきたものが、実はアジアの1つの国に代表され、これが誇張されて「アジアの特徴」「『東洋』の特徴」とされてきたとも考えられるだろう。

第3に、外的刺激への主人公の対処行動についてはどうだろうか。まず「外的刺激が同方向の場合の主人公の受容の有無」については、4カ国間で有意差は見られず、どの国でも援助の手が差し伸べられた際には、主人公は素直にそれらを受け入れることが多かった。したがってここでもアジア対欧州といった分類による異なる傾向は見られない。また「外的刺激が同方向の場合の主人公の反応形態」についても、同じアジア内で日本と台湾では異なる傾向を見せた。すなわち援助の手が差し伸べられたときに、主人公が積極的にその援助を受け入れるかどうかは、アジア内においても異なっていると思われる。

第4に、プライマリー・セカンダリーコントロールの比較結果についても、セカンダリーコントロールでは日本と台湾の間に有意差は見られなかったとはいえ、「逆方向」の刺激を過半数の主人公が受け入れたのは4カ国中、日本のみであった。またプライマリーコントロールにおいては、4カ国間で有意な違いは見られなかった。

なぜ本研究の結果は、今までの研究で言われてきた「東洋」対「西洋」という「文化の二分法」論では説明できなかったのだろうか。3つの理由が考えられる。第1の理由は同一地域であれば似たような文化を持っているという思いこみである。日本は台湾を1895年から50年間植民地統治し、最後の25年間は台湾にも内地と同じ法制度を用いた同化政策をとった。また多少異なる形態ではあるが仏教や儒教の思想はどちらの国にも入ってきている。さらに現在では日本の若者文化における流行が台湾でも僅かな時間差を経て同様に見られる。このようにある現象においては確かに類似点を多く持っているが、別の現象においてはアジアという同一地域内でも多くの相違点がある。以上のような類似点、

相違点はどこから生じてくるのか。時代による変化なのか、政治体制による違いなのか、経済状態の違いがもたらしたものか、教育目標による違いなのか。人間の行動のみならず、人間を取りまく社会・経済・歴史的な環境要因を説明変数として盛り込むことによって、今後文化差をより説得的に説明していく必要があると考える。

本研究において今までのものとは異なる結果をもたらした第2の理由として、対象年齢の違いがあげられる。多くの研究が青年期以上の年齢を対象としているのに対して、本研究では児童期前期の子どもを念頭においた教材を研究材料としている。したがって例えば、プライマリーコントロールにおいて4カ国間に有意差が見られなかったのは、他者や周囲の状況との対立を解決したり困難さを乗り越えることが、児童期前期の子どもの発達課題として必要であると、どの国の大人たちも考えているからかもしれない。さらに「外的刺激が同方向の場合の主人公の受容の有無」についても、この年代の子どもなら援助の手が差し伸べられた時にはその援助を受け入れてほしいという、児童期前期の子どもたちに対して共通に期待された発達の特性とも考えられる。年齢が異なればその社会で適当とされる行動も異なってくる。各社会における様々な年齢層の行動を十把一絡げにして説明するのではなく、年齢の違いによる期待される行動の違いも異文化間比較の中で考慮する必要があると思われる。

第3の理由として、本研究の分析材料が教科書であったことがあげられるであろう。教科書は現実の子どもの実態よりも、各社会の大人の期待や理想像、そして次世代に伝達したいメッセージなどが反映されていると考えられる。したがって子どもに人気のある本や漫画などを分析すれば、もしかすると異なった結果が得られたかもしれない。例えば他者が援助の手を差し伸べた場合、主人公がどの程度その援助を受け入れるかについても、青年期の子どもを対象にした本や漫画の内容を分析すれば、4カ国間で違いが見られる可能性はある。しかし分析対象が教科書であること、さらに児童期前期を念頭においた作品であることから、どの国の大人も子どもたちに対して、援助を素直に受け入れることを期待したとも考えられる。したがって、今後は各国の子どもが実際に教科書の内容をどのように受け止めているのかについて調査すると同時に、実際の子どもの行動と教科書内に描かれた行動とを比較分析しながら、理想と現実のズレをも考慮に入れる必要があるだろう。

2. 文化歴史的要因を考慮する必要性

自己のあり方や様々な行動は生まれた瞬間から異なるのではなく、子どもが成長していく過程で文化の違いによりさまざまな形に変化していく。その結果、前述したようにその違いを異文化間で比較する際、特に「東洋」と「西洋」の比較においては、さまざまな「文化の二分法」論が唱えられてきた。しかし「東洋」「西洋」それ自体の地域内における類似点・相違点に関する吟味は十分になされているとは言い難く、「東洋」と「西洋」は異なるものだという前提のもとで研究の枠組みが設定されてきた。

本研究においても、「東洋」と「西洋」という文化の二分法の枠組みに沿った形で研究が始められ、それぞれの地域内から任意の2国を抽出し、4カ国間で有意差が見られた場合には、アジア対欧州の分析と共に、アジア内、欧州内の比較を行った。その結果、アジア対欧州の違いというよりも、それぞれの国に特有の違いや、地域を越えた類似点が見いだされた。このように本研究の結果が今までの研究結果と異なった理由については前にいくつかあげたが、これらの相違点や類似点がなぜ生じたのかについては「文化」に内包されている社会体制、経済状態、教育・保育制度、家族制度、子ども観、道徳観、教育観などの「文化システム」との関係性の中で分析する必要があるだろう。そしてこのような文化システムの変化が各社会の人間の行動をどのように変容させてきたかを検討する必要があるだろう。マレーシアとイスラエルの青年の行動をドイツのプライマリー・セカンダリーコントロールの仮説に当てはめて比較したところ、各国内の社会経済的な変化が両国の青年の行動に影響を与えて

いることが指摘されている (Seginer, Trommsdorff & Essau, 1993)。また社会経済状態の変化と、個々の家族の成員の関係性や子どもの性役割行動の変化との関連性を扱ったエルダー (Elder, 1974) の研究に見られるように、人間を取りまく環境の変化は人間の行動に少なからず影響を与えていく。社会経済的な変化による人間の行動の変化が、結果として比較した時点における文化差を生じさせたとも考えられるであろう。したがって「東洋」と「西洋」といった分類ではなく、「文化」に内包された文化システムとの関係性を今後探っていく必要がある。

しかしそうは言っても、文化システムと人間の行動との直接の関係性を探るのは容易ではない。人間の行動を規定する文化システムがたとえ大きく変化しても、人間の行動がそれに対応してすぐに変わっていくとは限らない。変化までの時間差は必ず存在し、人間の行動の種類によって時間差の長さは異なるであろう。親の性役割行動などのように国の施策が大きく変われば、比較的短期間で変わっていくものもある。だが、他者と対立したときの対処行動などのように、長い歴史の中で育まれた社会の価値観に基づいた行動などは、社会状態や制度が変わっても短期間では変わりがたいものであろう。例えば東 (1994) は、日米の行動を比較し、変化が無意識的な行動や心の動き方までに及ぶ速度には長い時間がかかり、変化するまでには四世代はかかるであろうと推測している。政治経済等で大きな変化が起これば、はじめ風俗に変化が起これ、徐々に明示的な行動規範が修正され、いくつもの反動で揺れ動きながらも行動の表面的な変化が普及し定着する。そして、だんだんに人々が他の人々にどのような行動を期待するかが変化し、やがてそれが心情的な認知様式の変化をももたらす。東のこのような仮説に従えば、人間の行動を異文化間で比較する際にも、人間の行動をどの水準で比較しているのかについて論じる必要があるだろう。すなわち少なくとも表面的な意識された水準の行動なのか、それとも無意識の水準での行動を比較しているのかによっても、文化システムと人間の行動との関係性は異なってくると思われる。

本稿では「東洋」と「西洋」に分けて文化を論じる「文化の二分法」論について、日本、台湾、イギリス及びドイツの教科書の作品を比較することにより、各社会内で望ましいとされる対人関係のあり方の観点から検討してきた。その結果、今までの研究で見いだされてきたような「東洋」、「西洋」に特徴的な傾向があるとは言えないという結果が認められた。本研究での結果を今までなされてきた研究と比較し、さらに同一地域内での対象国を増やし、歴史的な比較をも加味することによって、文化システムと人間の行動との関係性の観点から、異文化間の相違点や類似点を再検討していくことが今後の課題となるであろう。

〔註〕

- 1 北山・宮本 (2000) は、「東洋」を日本、韓国、台湾、香港などの東アジアの国々とし、「西洋」を欧米の白人、中流階級の文化と限定した上での結果を提示している。しかし多くの比較研究においては、対象者が所属するより細かな地域性の特徴が加味されておらず、国内または同一地域内における違いについても検討されていないことが多い。
- 2 台湾を1つの国と捉えるか、それとも中華人民共和国 (以下、中国と称する) に属する1地域と捉えるかについては、別の議論をする必要があるが、今後中国の教科書も分析の対象とし、国家の政治・経済の体制の違いなども考慮に入れて分析していくため、本稿では台湾 (中華民国) を1つの国家として扱う。
- 3 作品の選択基準に変更が生じたため、イギリス、日本の作品についてはすべて分析し直している。またイギリスの教科書に関しては、塘・真島・野本 (1998) では1978年～1991年に出版されたものを対象としたが、本研究ではできるだけ他国の教科書の出版年と合わせるために、1980年以降のもののみを分析対象とした。したがって塘・真島・野本 (1998) にて扱った日本とイギリスの教科書の総数と本研究で

扱ったそれらの総数とは異なっていることを断っておきたい。

- 4 台湾では1996年より教科書編纂に関する改訂がなされ、教師は国語の教科書に関して、国立編譯館主編が編集作成する教科書以外に、政府の検定を受けた民間の出版社の教科書も扱えるようになった。但し、本研究の分析段階（1996年）では、この制度はまだ始まったばかりであり、新しく出版された民間の教科書がどの程度台湾で使用されているかについての実質的な数値が出されていなかったため、国立編譯館主編のもののみを使用した。2000年段階では、国立編譯館主編を含む6社から国語の教科書は出版されている。2000年度に出版されているものは以下の通りである。(1)国立編譯館、(2)台湾新学友書局股份有限公司(3)南一書局企業股份有限公司、(4)翰林出版事業股份有限公司、(5)牛頓出版股份有限公司、(6)康軒文教事業股份有限公司。
- 5 本研究の分析に用いたイギリスの教科書選定については、塘（1995）を参照してほしい。
- 6 但し、ザーランド州は小さな州のため、州自体で発行している推薦リストはなく、周辺の他州の教科書リストを使用している。
- 7 出版年度が各国によって異なることは問題であるため、今後新たに行う研究では、各国とも2000年に出版された教科書を分析対象に選んで分析を進める予定である。
- 8 日本とイギリスの事情については教科書研究センター（1990）を参照のこと、またドイツについては各州の教科書推薦リストのなかに採択されるにふさわしい教科書の基準が述べられている。台湾についても日本同様検定制度がある。また本研究に使用する教科書選定に関しては、塘（1995）、塘・真島・野本（1998）も併せて参考にしてほしい。
- 9 1つの文章（センテンス）とは、句点から句点まで、またはピリオドからピリオドまでの範囲を指す。
- 10 χ^2 検定における多重検定を行っているため、名義水準 α を定め、 χ^2 を有意になりやすくした上で、部分的に 2×2 分割表の有意性を定めて分析している。本研究の分析の中で、 χ^2 検定における多重検定を行う際には、すべてこの法則を適用している。
- 11 今後、日本、台湾の他に中国、韓国、タイで使用されている教科書を加えてアジア内での比較を行う予定である。

[文献]

- あまんきみこ. (1992). お母さんの目. 小学国語3上. 大阪書籍, 64-70.
- 東洋. (1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.
- Elder, G.H. Jr. (1974). *Children of the great depression: Social change in life experience*. Chicago; London: The University of Chicago Press.
- フェラーロ, ゲーリー. (1992). 江夏健一・太田正孝監訳, I B I 国際ビジネス研究センター訳. 異文化マネジメント：国際ビジネスと文化人類学. 東京：同文館.
- ホール, エドワード・T. 宇波彰（訳）. (1983). 文化としての時間. 東京：ティービエス・ブリタニカ.
- 樋口恵子他. (1994). 新家庭一般. 東京：一橋出版.
- 今井康夫. (1990). アメリカ人と日本人. 東京：創流出版.
- 伊東清枝他. (1991). 改訂 家庭一般. 東京：東京書籍
- 岩崎芳枝他. (1991). 新版家庭一般：改訂版 新しい家庭の創造をめざして. 東京：実教出版
- 香川芳子・本多洋・湯沢雅彦. (1994). 新・家庭一般. 東京：中教出版.
- 北山忍・宮本百合. (2000). 文化心理学と洋の東西の巨視的比較：現代的意義と実証的知見. 心理学評論, 42, 57-81.
- 経済企画庁編. (1992). 国民生活白書（平成4年版）. 大蔵省印刷局.

- 熊山昌久. (1991). 水性文化と油性文化. 東京：大修館.
- きし なみ. (1992). たぬきの糸車. こくご一下ともだち. 光村図書, 42-50.
- 教科書研究センター. (1990). 平成2年度海外教科書事情調査報告書：イギリス・ドイツ・フランス. 東京：(財)教科書研究センター.
- 国立編譯館主編. (1996 a). 善意的手. 国民小學 國語 第4冊 (二年級下學期). 国立編譯館印刷, 29-30.
- 国立編譯館主編. (1996 b). 媽媽和老師. 国民小學 國語 第4冊 (二年級下學期). 国立編譯館印刷, 31-34.
- Kolk, A.A. & Kuch, T. (1992). Moni und ihr Fahrrad. In *Neue Bunte Lesewelt*. Verlag Ludwig Auer Donauwörth, 86.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98(2), 224-253.
- Markus H. R. & Kitayama, S. (1994). Sense, culture, and sensibility. In Kitayama, S., & Markus, H.R. (Eds.). *Emotion and culture : Empirical studies of mutual influence*. (Chap. 2 : 23-50) Washington D.C. : American Psychological Association.
- 中山治. (1988). 「ばかし」の心理：人見知り親和型文化と日本人. 東京：創元社.
- N H K放送文化研究所世論調査部. (1996). 1995年国民生活時間調査報告書. N H K放送文化研究所.
- 大日向雅美他. (1994). 生活一般. 東京：学習研究社.
- Rothbaum, F., Weisz, J.R. & Snyder, S.S. (1982). Changing the world and changing the self : A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37.
- Seginer, R., Trommsdorff, G. & Essau, C. (1993). Adolescent control beliefs : Cross-cultural variations of primary and secondary orientations. *International Journal of Behavioral Development*, 16, 242-260.
- Shweder, R. A. & Bourne, E. J. (1984). Does the concept of the person vary cross-culturally? In Shweder, R. A. & Levine, R. (Eds.). *Culture theory*. (pp.158-199) Cambridge : Cambridge University Press.
- 塘 利枝子. (1995). 日英の教科書に見る家族：子どもの社会化過程としての教科書. 発達心理学研究, 6(1), 1-16.
- 塘 利枝子・真島真里・野本智子. (1998). 日英の国語教科書にみる対人的対処行動：内容分析的検討. 教育心理学研究, 46(1), 95-105.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and Collectivism*. Boulder : Westview Press.
- Trommsdorff, G. & Friedlmeier, W. (1993). Control and Responsiveness in Japanese and German mother-child interactions. *Early Development and Parenting*, 2(1), 65-78.
- Weisz, J.R., Rothbaum, F.M. & Blackburn, T.C. (1984). Standing out and standing in : The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, 39 (9), 955-969.

[付記]

本研究は、文部省科学研究費奨励研究A（課題番号：10710071）によって行われました。白百合女子大学の真島真里さん、野本智子さん、Ming Chuan University（台湾）の童昭恵（Chao-Huei Tung）さん、University of Berne（スイス）のYuka Nakamuraさんには翻訳、分析に関わっていただきました。ここに記して御礼申し上げます。

Interpersonal Coping-Behavior Reflected in the Elementary School Textbooks :

Do the comparisons of the "East" versus "West" have validity in the cross-cultural psychology?

Rieko Tomo

Atsushi Kimura (National Chengchi University, Department of Education, Master Course)

The contents of school texts are very important factors in the socialization of children, and the behaviors displayed by textbook characters are thought to reflect behaviors that each culture regards as suitable. The purpose of this study is to reconsider the interpersonal coping-behavior styles labeled primary and secondary control by Weisz et al. (1984) and depicted in 537 stories in elementary school texts for 6-9 year-old children in two Asian countries (Japan and Taiwan) and two European countries (Germany and Britain).

These texts were analyzed for the types of stimuli (others vs. circumstance ; positive vs. negative ; intentional vs. unintentional) acting on the main characters, and the corresponding coping-behaviors of the main characters (accepting vs. rejecting ; active vs. passive ; changing vs. non-changing). They were also analyzed for the primary-secondary controls that were constructed as the stimuli and coping-behaviors of the main characters.

The findings were as follows. (1) When the stimuli tried to influence to the main characters' requests or behaviors, the Japanese stimuli were portrayed as adding more circumstance stimuli than those in the other three countries, and there was no significant difference between Asian and European texts. (2) The Taiwanese stimuli were portrayed as more supportive than stimuli in the other three countries. There was significant difference between Asian and European texts, but there was also significant difference between Asian countries. (3) There was no significant difference of the stimuli's intention in the four countries. (4) There was no significant difference between the accepting behaviors of the characters toward the supportive stimuli in four countries. (5) The Taiwanese characters were portrayed as behaving more actively toward the supportive stimuli than characters in the other three countries. There was a significant difference between Asian and European behaviors, but there was also a significant difference between Asian countries. (6) There was no significant difference of primary control in the four countries. (7) The Asian characters were portrayed as behaving as secondary control more than the Western ones, but only the Japanese characters show this kind of behavior in more than fifty percent of the cases. These results indicate that the cultural dichotomy, typified as "East" versus "West" should be reconsidered in cross-cultural psychology, in regard to both child development factors and as socio-historical factors within the cultural system.